

学位論文題名

中国内モンゴル・チャハルにおける
遊牧民の文化変化に関する生態人類学的研究

学位論文内容の要旨

中国内モンゴルにおける乾燥地帯では、漢人移民の増加に伴う過剰開墾、定住化と家畜頭数の増加に伴う過剰放牧による地表の裸地化が進み、栄養分に富んだ植物群落が放牧に適さない植生に置き換えられている。その対応策として、草地をフェンスで区切る集約的利用などの方法が導入されている。そのため、これまで遅れている生業様式と見なされ、現在限られたところでしか行われていない遊牧では、定住化がさらに進むようになった。

本研究では、生態人類学的視点から、年間を通した遊牧がどのように定住化あるいは冬－夏遊牧様式に変化したのか、遊牧民の人口がどのように流出し、生計活動がどのように変化したのかなどの問題を明らかにすることを目的とし、同地域にあるチャハル地方を研究対象として、モンゴル人と漢人との混住がある、混住がない、遊牧が行われているという状況に基づき、アダリガ・ホト、アライオス・ホト、タバンオド・ガチャーの3地点で集中調査を行った。本論文はそれらの地点での調査結果をまとめたものである。なお、チャハルは中国内モンゴルにおける十数あるモンゴル部の一つである。

第1章序論では、対象地域に関するこれまでの研究状況、文献資料と現地調査で明確になった19世紀末から20世紀にかけての中国内地からの漢人の移住経緯、社会制度の変化などが概略的に触れられる。歴史上、「水と草とをもとめて転々と移動」するような遊牧が政治、社会などの変化によって、その活動範囲が縮小したことが述べられる。さらに、各調査地点で調べた植生の状況がまとめて述べられている。

第2章は、アダリガ・ホトの事例を扱っており、同一集落において漢人との混住に伴う場合の遊牧の定住化の過程、牧畜民の生計活動の変化を分析したものである。以前の四季放牧地の立地条件、利用状況の変化、漢人の入植、モンゴル人の流出状況が明らかにされて、入植した漢人による遊牧地での固定家屋の建築や、漢人村の農地の拡大が定住化を促進したことが論じられる。通常見られない夏营地での定住は、農地の位置や各放牧地の立地条件と関係している。牧畜民の生計活動の中心が野外放牧から飼料生産に変化しつつあることは、定住化と人口増加に伴う過剰放牧による植生状況の悪化と関連している。モンゴル人の人口流出を引き起こしたのは、漢人のモンゴル人集落地への相次ぐ移住であることが明らかにされている。

第3章は、アライオス・ホトの事例を扱っており、同一集落において漢人との混住を伴わない場合の牧畜民の生計活動の変化が記載されている。当調査地点では、漢人村とモンゴル人集落地の位置や立地条件、牧畜民の家畜経営の変化、人口流動の実態、周囲農村の経営状況などが分析される。モンゴル人が基本生活を満足させる家畜頭数を維持するために、若者を町に出すか、出稼ぎをしていること、あるいは世帯全員が北部にある他の地域に移転したことは、周囲の漢人村農業者の牧畜への参入による放牧地の減少に関連していることが明らかにされている。

第4章は、タバンオド・ガチャーの事例を扱っており、現在遊牧が行われている場合の生計活動の変化に着目したものである。この事例では、四季遊牧から現在の冬－夏遊牧様式への変化の過程が明確にされた。その結果、遊牧様式の変化は、放牧地の減少、植生状況の悪化に関連するとともに、「人民公社」制度の実施、放牧地での国营会社の設立、家畜と放牧地の個人への分配にも密接に関連していることが明らかにされている。

第5章は、上記3か所の事例を総合的に分析したものである。第2章と第3章の事例に

論述された四季遊牧の定住化、モンゴル人の人口流出、第4章の事例に論述された四季遊牧の冬-夏遊牧への変化、生計活動の変化は、漢人の入植に伴う放牧地の減少に関連するとともに、人民公社制度、請負制度などの導入とも関連している。遊牧の進歩という考えから、定住牧畜が強化されているが、それによって牧草の状況が悪化していることが明らかにされている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 煎 本 孝
副 査 教 授 津 曲 敏 郎
副 査 助 教 授 佐 々 木 亨

学 位 論 文 題 名

中国内モンゴル・チャハルにおける 遊牧民の文化変化に関する生態人類学的研究

本論文は、内モンゴル自治区におけるチャハル・モンゴル人の遊牧の変化の過程を生態人類学的視点から記載し、その生態的、社会的要因を実証的に明らかにしたものである。本論文は人間活動を通じた自然と人間との関係という生態人類学的視点から、内モンゴルにおけるチャハル・モンゴル人の遊牧の変化を明らかにするものであり、モンゴル人の人口移動、生計活動、施設、家畜管理方法、および経営方針の変化などに焦点を合わせたものである。方法は観察および聞き取りのための現地フィールド調査によるものであり、1995年8月はじめから9月末の2か月間、内モンゴル自治区のシリンゴル・アイマグ（錫林郭勒盟）ショローンフフ・ホショー（正藍旗）サンギンダライ・ソム（桑根達来蘇木）のタブンオド・ガチャー（塔本敖都嘎查）、1996年8月から9月の2か月間、ウラーンチャブ・アイマグ（烏蘭察布盟）チャハル（察哈爾）右翼後旗にあるウランハダ・ソム（烏蘭哈達蘇木）のアダリガ・ホト（阿達日格浩特）、1997年8月から9月の1か月間、同ソムのアライオス・ガチャー（阿来烏蘇嘎查）のアライオス・ホト（阿来烏蘇浩特）における集中調査が行われた。同氏が内モンゴル出身であるとはいえ、計5か月間のフィールド調査は期間、時期など必ずしも十分とはいえないが、聞き取りによる情報資料で補うなど遊牧の歴史的変遷を追うには大きな支障はないものと考えられ、記載と分析の結果は博士論文として高く評価されるものと判断される。

本論文のもととなった研究の一部は既に学会誌に発表されており、日本におけるモンゴル遊牧の研究者によっても引用されるなど高い評価を得ている。とりわけ、本論文は、遊牧に関する生態人類学、文化人類学（民族学）の領域にわたり、重要な一次資料を提供している点で、今後の遊牧研究の推進に大きく貢献するものである。

本論文の博士論文としての内容、およびその学問的貢献は高く評価される。当委員会は、本論文が博士（行動科学）を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。